

深川探索

松尾芭蕉・1

平成20年2月12日に協会事務局が当地に引っ越してきたことを記念して始まったこの連載企画も、これまで、名所旧跡、偉人、俳人の気品高い紹介から、ご近所の只の呑助が集まる小汚い焼鳥屋さんや、どっちがお客だか判んない怖い名物オバサンが仕切るお店まで幅広い話題でつづられ、今回で9回目に至りました。

この企画の真髄は、筆者が自らの足で探検・経験し、協会が如何に文化的で庶民的な地に在るかを紹介し、会員の皆様がこれを読んで「ならば、ちょっと寄って見るか」と気軽に立ち寄る気呼び起こすことと認識し、今回から私が4回担当させていただきます。第1回と2回が芭蕉を中心に歴史探訪。3～4回は深川、木場の季節の催しを紹介します。

◆居を構え、深川をこよなく愛した芭蕉

元禄期の江戸深川は、町人や職人の町として活気にあふれた町で、水路が縦横に走り、街々を橋がつなぐ水の都・江戸を代表する場所のひとつだったようです。300年以上の時の流れは、周囲の景観を一変させましたが隅田川の流れは今も変わりません。まさに、芭蕉の思想である「不易流行」（いつの時代にも変わらぬものと、時代とともに変化するものは表裏一体である）を感得させてくれます。

万年橋通りから万年橋にかけての一带は、芭蕉の庵生活が営まれた場所として知られています。この芭蕉庵があったことを記念して隅田川の河岸に建てられたのが「芭蕉記念館」です。（写真-1）

冠木門が周囲の建物の竹まいを異にする記念館入り口を入ると小さな庭園に植えられた木々の枝に芭蕉の句が書かれた短冊があちこちに下げられ、なぜか侘び寂びの風情を感じさせる雰囲気が出てきます。小さな庭ですが流れや池、小さな滝、築山もある純和風庭園の趣を醸し出しています。2階3階に展示されている様々な資料とほの暗い展示室には後世になって多くの人たちが描いた芭蕉の肖像画も掲げられています。記念館の庭園の奥に祠が置かれていますが、その傍らには「古池や蛙飛び込む水の音」の句碑が立っています。一階には手軽な料金で借りられる貸会議室もあり、筆者も句会でお世話になったことがあります。

（写真-2）

◆元禄を生きた二つの個性、芭蕉と紀伊国屋文左衛門 清澄庭園

回遊式林泉庭園として知られる清澄庭園の池の奥ここにも、「古池やかはず飛び込む水の音」の句が刻まれた石碑があります。（写真-3）

1934年（昭和9）に其角の門流によって建てられたもので、もとは隅田川の岸边にあったものを、護岸工事の際に移されたそうです。現在の清澄庭園を造園したのは三菱財閥創設者・岩崎弥太郎ですが、元禄期に、この地は豪商・紀伊国屋文左衛門の別邸だったともいわれます。清貧のうちに独自の詩境を求めた芭蕉の句碑が、同時代の豪華の代名詞と

もいえる人物の庭にあるとは、ちょっとした歴史上の皮肉な巡りを感じさせてくれます。（写真-4）

その4 ☆文・写真 小田 泰平

元編集担当



写真-1

芭蕉記念館には毎日多くの俳句愛好者が訪れる



写真-2

記念館内に掲示されている深川界隈の芭蕉句碑案内図



写真-3

庭園の奥まった池にある芭蕉の句碑



写真-4

全国の奇石・名石が多く蒐められている清澄庭園